

## 『こんな夜更けにバナナかよ』『なぜ人と人は支え合うのか』



筋ジストロフィーの重度身体障害者とボランティアの奮闘を描いたノンフィクション『こんな夜更けにバナナかよ』が刊行から15年余、ロングセラーを続けている。公開中の映画も反響を呼ぶ。何が人々の心をつかむのか。著者の渡辺一史さんが新刊『なぜ人と人は支え合うのか』を出したのを機に、聞いた。

「わがままで気まぐれ、強気と弱さが同居する。とにかく強烈な、素っ裸で生きている人でした」。

2000年から2年ほど取材を続けた故・鹿野靖明さんのことを、そう振り返る。

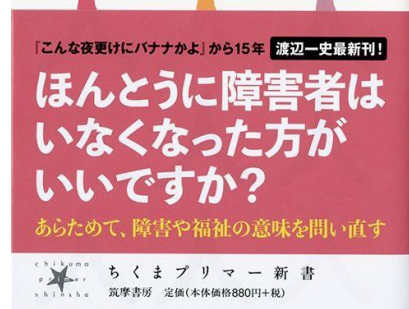
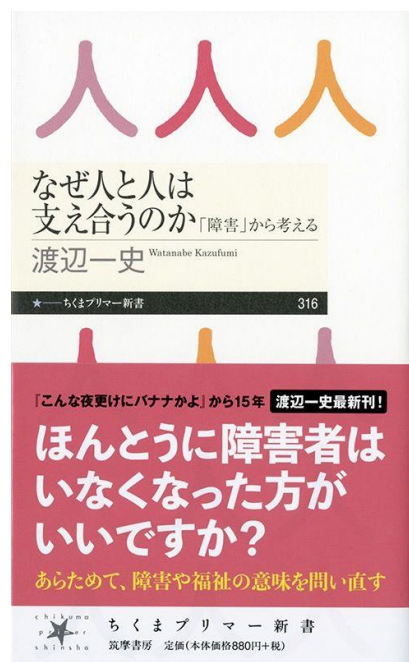
ボランティアは、のべ500人超。振り回されつつ、閉口しつつ、鹿野さんを支えることで彼

らもまた支えられている現場は、深い森に分け入ったようだった。

「介護の取材は初めてでしたが、性の問題や排泄も含め、人間のすべて、生きることすべてがあらわになって凝縮された、巨大な混沌だと感じました」

その全体性を描き切りたいと、自らも介助に加わるなど取材に明け暮れた。愛や涙で語られがちな福祉という題材の定型を鮮やかに覆す作品に結実しえたのは、人と人との生々しいせめぎあいが「劇薬」と呼ぶほかなかったから。大宅壮一ノンフィクション賞と講談社ノンフィクション賞をW受賞した。

今回の映画化は、そんな原作のトーンをくむ内容になり、満足しているという。鹿野さん役を務めた俳優、大泉洋さんの発言も、うれしかった。



自分の子どもには、人に迷惑をかけないようにと教えてきたが、改めたい。できないことは頼りなさい、でも頼られたときは応えられるような人になりなさい、と伝えます。

「障害者の人たちの訴えを見事に言い当てた言葉だと思いました。同時に、自己責任という価値観を誰もが内面化させられた、時代の風潮を表してもいる」



一方、中高生向けに書いた新刊は、序章で「なぜ障害者と会うと緊張するの？」と挑発する。差別はいけないといった、きれいごと抜きで話そう。生身のつきあいを通じ、人が支え合うことの不思議さ、豊かさを考えていこう、と説く。

寡作である。11年に発表した『北の無人駅から』もサントリー学芸賞などを受賞、次作が期待されるが、白紙のまま。複雑な現実をつかみとったと確信するまで、延々と取材を続けずにいられない。“反時代的”なスタイルを守っている。

「書きたいのは、始末におえない普通の人、です」

(朝日新聞 藤生京子)